

地域の「ひと・もの・こと」を活用した総合的な学習の時間の充実

- 【研究代表者】谷尻 治（和歌山大学教職大学院）
【共同研究者】貴志年秀（和歌山大学教職大学院）
矢出大介（和歌山大学教育学部附属小学校）
赤松広志（和歌山市立有功東小学校）
中山義之（和歌山市立伏虎義務教育学校）
細田和希（和歌山市立雑賀小学校）

1. 実践研究課題について

『地域の「ひと・もの・こと」を活用した総合的な学習の時間の充実』

「総合的な学習の時間」が全国の小学校に正式に導入されたのが平成12年度（2000年度）のことである。そのねらいは当初から「自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育てること」（平成10年学習指導要領）と、問題解決の視点・探究的視点が明確に打ち出されていた。しかし導入初期の頃は、誰もがほぼ指導したことの少ない分野であり、学校裁量や教師による裁量部分が多かったこともあって、学校現場では様々な試行錯誤が重ねられた。

20年近くの時を経て、各地域・各学校の学習内容が整理され、系統だったものとなってきた。その反面、多忙化もあって、初期の頃の熱気が冷めた感が否めない。教師が児童生徒と共に一緒になって課題を探究していくという「総合的な学習の時間」の最も核となる部分が薄れているというのが現状ではなかろうか。

そこで、もう一度、「総合的な学習の時間」の原点に戻りつつ、「実社会や実生活の中から問いを見だし、自分で課題を立て、情報を集め、整理・分析して、まとめ・表現することができる」（平成29年学習指導要領）ことを目指した実践を創造し、さらに和歌山全体へと発信することが重要であると認識して、共同研究を立ち上げた。児童にとって地域の「ひと」との出会いが特に重要であり、人との出会いを通して、地域を知り地域を見直し地域を愛する態度が育成されることを共同研究協議会で確認した。以上により、今年度の実践研究課題は上記の通り設定した。

2. 今年度の活動

主な活動は次の通りである。

(1) 共同研究協議会 *随時

共同研究メンバーが所属する各校と各自の「総合的な学習の時間」の計画や意見の交流

(2) 公開授業研究会開催時の相互参観・協議会参加

6月9日 附属小学校にて開催の複式授業研究会・公開授業（矢出）

9月27日 附属小学校にて開催の日本教育方法学会・公開授業（矢出・谷尻・貴志）

11月2日 和歌山市立雑賀小学校にて開催の「近畿小学校社会科研究大会」・公開授業（細田）

11月21日 和歌山市立有功東小学校にて開催の「生活科・総合的な学習の時間 研究発表会」・公開授業（赤松）

(3) 現職教育講演

10月3日 和歌山市立伏虎義務教育学校にて開催の現職教育研修（中山・谷尻）

(4) 講演会

12月15日 和歌山大学にて「石堂裕氏講演会」

3. 共同研究者実践概要

単元名『和歌山城 PR プロジェクト』

実践者：矢出大介（和歌山大学教育学部附属小学校5・6年複式学級）

単元を計画した段階では、本格的な機材や撮影のプロ・劇団の人と出会うことで、子どもたちは映像制作に主体的に取り組むと考えていた。しかし、実際の授業においては、撮影や演技の技術的なことではなく、伝えたいことが明確になることが重要であった。子どもたちは和歌山城で出会った忍者に魅力を感じていた。忍者の魅力を多くの人に伝えたい。この気持ちが子どもたちの映像制作の意欲を高めていった。忍者に会いたい気持ちから子どもたちは、何度も和歌山城に調べ学習に行った。自分たちの撮影した映像を忍者に見てもらい、好評をしてもらった。その意見を大事にし、自分たちで何度も映像を見ながら話し合った。

映像制作を進めていく中で、自分たちの思いを分かりやすく伝えたい気持ちが高まった。忍者との出会いによって意欲を高めることができたので、図工の時間を活用して日本でクレイアニメーターの先駆者であるI先生にクレイアニメーションを教えてもらった。

和歌山城で取材活動・現地調査・撮影をし、自分たちの考えを共有するために撮影した映像を見ながら話し合いを繰り返し行いながら、子どもたちは映像制作を進めた。

自分だけでは解決できない問題を友達と一緒に考えて乗り越えていく。それでも解決できない問題は大人と一緒に考え、乗り越えていった。完成した映像作品の鑑賞会をぶらくり丁のみんなの学校で行う。その時に、自分たちの学んだことを伝えたりすることを通して、実社会とのつながりを感じていくと考えている。



単元名『紀の川を探ろう～紀の川がつなぐ水とくらし～』

実践者：赤松広志（和歌山市立有功東小学校6年風組）

和歌山県を縦断する紀の川を学習材に、そこに暮らす「人」に焦点をあてて学習を展開した。1学期、子ども達は地域を流れる川「千手川」を探検し、地域への愛着を深め、川と人との関わりに気付いた。2学期、千手川河口の紀の川とつながる場所を探検に行ったことから紀の川への関心が高まり、本単元が始まった。吉野川・紀の川流域の、川の流れがもたらす「恵み」をブランド化した「紀の川じるし」のポスターから子ども達は「紀の川も千手川と同様、人の生活と関わっている。」と考え、地域から離れた上流や下流の生活と紀の川との関わりに疑問をもった。そこで下流の和歌浦、上流の奈良県川上村の調査活動を行った。



和歌浦では、しらす漁師の横田さんと出会い、しらすをきっかけに和歌浦を盛り上げたいという思いをもち、しらすという地域の資源を守る活動を行っていることを知った。川上村では、上流のきれいな水を下流に送ること等を掲げた川上宣言から、ここでも水という資源を守ろうとしていることを知った。さらに村を散策している際、地域おこし協力隊のエリックと出会った。集めた情報を整理する中で、子ども達は、上流～下流が関わり合っているという「紀の川じるし」のテーマの真意に気付いた。しかし、散策の際出会ったエリックは、協力隊としてどのような活動をしているのかという疑問が残り、再度学校に招き、話を聞くこととなった。協力隊は地域を元気にするために様々な活動をしていることを知り、その地域活性にかける思いにも触れた。「地域のために」と活動する協力隊の姿は、和歌浦の横田さんの姿と重なることから子ども達は、「上流と下流で暮らす人の思いのつながり」に気付き、さらに「千手川で紀の川とつながる自分たちには何ができるのだろう。」と考え始めた。

単元名『市堀川の水辺の未来を考えよう』

実践者：中山義之(和歌山市立伏虎義務教育学校3年3組)

学校への登下校で通ったり、塾が終わった後、迎えを待っている間に遊歩道で遊んだり、子供たちが何気なく見ているのが市堀川である。近年、その市堀川を活用し、行政と民間団体が「MIZUBE プロジェクト」という街づくり(中心市街地の活性化)の一端を担う活動を行っている。また、市堀川の横に公園を作る計画も進んでいる。今回は、最近注目の集まる市堀川に焦点をあて、これまでの歴史やMIZUBE プロジェクトを行っている人の思いを聞くことで、市堀川や自分たちの住む街への関心を高めたいと考えた。

まず、市堀川への興味づけを行うために、平井先生(環境アドバイザー)と楫先生(県立自然博物館)をゲストに迎え、生き物観察会を行った。

次に、昔の川についての調査を行った。また、内川をきれいにする会の野井さんからも60年程前から今までの市堀川の歴史を教えてもらった。その際、船に乗って市堀川を子供に体験してもらうイベントを行ったり、MIZUBEプロジェクトというチームが活動をしたりしているということを教えてもらった。

そして、MIZUBEプロジェクトの吉川さんからどうして市堀川の水辺を盛り上げようとしているのか、どのようなプランを考えているのかを教えてもらった。吉川さんから「いいプランがあったら紹介してください。」との話をいただき、学級で「こども水辺未来プラン」を考えました。市堀川に足りないものを話し合うと、大人も子供も「もっと楽しめる川」・「もっとくつろげる川」というキーワードが出てきた。それらのキーワードをもとに、具体的なプランを考え、前期課程の学習発表会で発表を行った。



単元名『日本の“文化”と“心”を学ぼう！～和菓子職人須賀さんの生き方に学ぶ～』

実践者：細田和希(和歌山市立雑賀小学校6年4組)

日本の伝統文化である和菓子を学習材として取り上げ、2学期の学習をスタートさせた。伝統文化とは言え、実際に和菓子を口にする機会は減ってきている。特に、子どもたちにとってはなおさら身近なものとはなかなか言えない。そこで、まずは子どもたちが和菓子についての疑問を出し合い、1人1人が調べる課題を決め、調べたことを発表するなかで、和菓子が日本人の生活に深く根差してきたこと、様々な種類があることなど、基本的な知識を共有した。次に、子どもたちは「一度自分たちで和菓子を作りたい」という思いをもち、作り方を調べて様々な形の練り切りを作った。しかし、思うようにいかないことも多く、味もよくなかったため、今度は「和菓子屋さんに見学に行きたい」と考えるようになった。

そこで紫香庵の須賀さんと出会い、たくさんの和菓子を食べさせていただいたり、話を聴かせていただいたりした。須賀さんと出会ったことで、和菓子がずっと受け継がれてきたことを改めて理解し、それを後世に残していこうとする和菓子職人の思いにふれた。ここから、「自分たちもおいしい和菓子をつくって食べてもらい、たくさんの人に和菓子の良さや歴史をしてもらいたい」と思うようになり、そのために和菓子を販売することはできないかと考え始めている。



4. 石堂裕氏講演会概要

2018.12.15 開催

(1) 目的

先進的な総合的な学習の時間の実践をされている現場の先生をお招きし、実践の具体的な取組とその背景にある実践者の想いを学び、和歌山の先生方の総合学習実践力向上を目指す。

(2) 講師紹介

石堂 裕先生（兵庫県たつの市立新宮小学校主幹教諭；本年度は2年生担任）

公立小学校でクラス担任をしながら、全国各地の小・中・義務教育学校に出向き総合学習の指導を行う。また講演会・ワークショップの講師を務める。学会誌や教育誌の執筆も多数。

著書「今からできる石堂流アクティブ・ラーニングのABC」、企画「ドスルコスル」NHK for School は全国的にも有名。

(3) 当日の様子

土曜日の午後に開催された講演会には、学期末にも関わらず本事業に携わる4名の教諭の他、和歌山市の小中学校の先生、和歌山大学教職大学院生等合計35名の参加があった。

講演内容は2部に分かれ、前半は「新学習指導要領で求められる探究的な授業づくりのポイント」と題して、今私たちが考え実践しなければならない授業改善のポイントのお話を、また後半は、「具体的な単元をもとにした授業づくりのポイント」と題して、ご自身の実践（総合や生活科等）を例に挙げ、探究的な授業の中でみられる子どもの姿と教師の役割についてのお話をお伺いしました。以下、お話の中でとくに印象に残った先生の言葉を紹介します。

- ・子どもが探究する授業は「子どもの様子」「学習内容」「学習方法」の微妙なバランスを考えながらつくっていく。もっともウエートが大きいのは「子どもの様子」である。
- ・クラスの子どもの多くは学習内容が理解できていなくても理解したふりをしている。
- ・（どのクラスにもいる）多動な子は概ね感覚が優れている者が多い。だから（小学生）新聞のような文字や写真等、情報がたくさんある資料にも興味をもって取り組める。
- ・落ち着かないクラスでは、例え3秒でもいいので静寂の時間をつくるのが大切。
- ・自力解決場面では口出ししない。机間指導での先生の支援が他の子の思考を妨げる。
- ・子ども同士の対話と先生の発言は「もちつき」の関係。子どもが餅つき役で先生は手水役。手水が多いと子どものついた餅はべちゃべちゃになる。
- ・子どもたちの「よかったところ」は「もっとよくなるところ」でもある。
- ・子どもの書いた作文は全体に返す必要はないが、メモは全体に返す必要がある。
- ・教科学習と道徳科を関連させることで子どもは客観的に自己を見つめなおすことができるようになる。
- ・子どもの活動が地域を動かす。
- ・子どもたちに「ふるさと」を意識させたい。
- ・街は人がつくる。だから人を変えれば街が変わる。
- ・子どもから子どもへの実践の引継ぎが大切。
- ・異学年の交流は「win,winの関係」に。
- ・継続する大切さと継続する難しさ
- ・先生がわからないときは「わからない」と言う。
- ・個人の振り返りの後は、必ずその価値づけを行う。
- ・授業づくりに必要な「3ワーク」

- ① ネットワーク ② フットワーク ③ チームワーク

【石堂 裕先生】



まさに3ワークのすべてを兼ね備えた石堂先生の素敵なお話であった。

5. 成果と課題

(1) 成果

これまで、和歌山市の「総合的な学習の時間」の実践や研究は各校・各教員による「点」として行われてきた感があり、学校の枠をこえて研究的に実践を交流したり検討したりするという面がやや弱かった。しかし、「点」で行われてきた実践ではあるものの、年間を通じて学級で一つの課題を徹底的に探究するという活動を行ったり、学校をあげて毎年研究を蓄積してきたりと、全国に誇れるような実践や研究が和歌山市にもたくさんある。児童の大きな変容を生み出した実践事例、マスコミに取り上げられた実践事例も多い。この財産を、和歌山市・和歌山県全体へ広げようという動きが始まったことがまず特筆すべきことである。

また、NHK 番組にも携わり全国的なレベルで活躍されている石堂裕氏のお話を、じっくりと時間をかけて聞かせていただく機会を設けられたことも大きな意義の一つである。石堂氏の教育にかける熱意が、会場に集った者にダイレクトに伝わった。石堂氏自身が「その後、各地での講演などで、和歌山での講演会のように話を語っています」と講演会後のお手紙で述べられていたほどである。参加者は探究的に行う活動・教科横断で取り組む学習の深さとダイナミックに魅了され、自らの教育を見直す機会となったことだろう。

次年度からスタートする和歌山大学教育学部の新カリキュラムでは「総合的な学習の時間の指導法」という授業が新たにスタートする。本共同研究を行っている谷尻と貴志も、この授業に深く関わることとなる。授業内容を準備する上でもおおいに参考になるこの1年間の学びであった。

(2) 課題

この研究はまだ始まったばかりである。各メンバーは、この1年間で得られた学びを基礎として、次年度以降の実践につなげたいという意欲が高まっている。知ること・学ぶこと・交流することを中心とした今年度の活動から、次の「批判的に検討する」や「学んだこと・実践したことを発信する」という段階へのレベルアップを求められている。具体的には

- ・授業を広く公開し、批判的に学び合うこと
- ・全国の優れた実践に直接ふれる機会を増やすこと
- ・全国レベルの研究会へ積極的に参加すること
- ・そこで、自らの実践を報告し、課題をみつけること
- ・それらをもとに、和歌山市・和歌山県全域へ、学び実践したことを発信すること

などがあげられる。

発信の方法は色々考えられるが、インターネット時代にふさわしい方法も視野に入れつつ、積極的な発信を実現したい。

参考文献

- ・村川雅弘 (2018) 総合的な学習の時間の指導法 日本文教出版
- ・渋谷一典 (2018) 生活科・総合的な学習の時間における主体的・対話的で深い学び 生活科・総合の実践ブックレット 日本生活科・総合的学習教育学会
- ・文部科学省 小学校学習指導要領 (平成 29 年告示) 解説 総合的な学習の時間編
- ・文部科学省 国立教育政策研究所 平成 29 年度全国学力・学習状況調査報告書・調査結果資料
- ・文部科学省 国立教育政策研究所 平成 30 年度全国学力・学習状況調査報告書・調査結果資料